

南三陸町朝日館跡の現況と評価

著者	田中 則和
雑誌名	東北学院大学東北文化研究所紀要
号	48
ページ	37-72
発行年	2016-12-15
URL	http://id.nii.ac.jp/1204/00023881/

南三陸町朝日館跡の現況と評価

田 中 則 和

1 はじめに

宮城県南三陸町志津川下保呂毛に所在する朝日館跡は、「朝日城」、「旭館」「志津川城」とも呼称される南三陸町を代表する、いわゆる山城跡¹である。後述するように志津川湾を望み、北上川舟運と連結する街道を掌握し、交通・流通を抑える絶好の立地である。

南三陸町は、2011年3月11日の東日本大震災・津波によって甚大な被害を受けた。大津波は、志津川湾に注ぐ水尻川の河口から遡り、朝日館跡の最下段郭の直下、標高約14mに達し²、周辺の民家を押し流した（第25図参照）。

現在（2016年10月）、未だ、復興途上の中にあつて、朝日館跡は観音堂のある主郭と参道は志津川の名刹大雄寺により刈り払いが行われ見学が可能である。その他は多くが山林であり、

十分に管理が復旧しておらず、立ち入りは困難な状況である。筆者は、2015年12月7日から2016年4月5日にかけて16日間にわたって現況調査を実施した。また、本年10月10日、17日に石積み周辺の補足調査を実施した。

このような時期の調査にもかかわらず、土地所有・管理者の大雄寺様、高橋長偉様、遠藤良一様はじめ、南三陸町教育委員会、地元の皆さまにたいへんお世話になったことを初めに深く感謝したい。

2 朝日館跡の概要

標高は最高部の主郭で75m（大土塁の頂部は約80m）、周囲との比高は65mである。年代は、15世紀－16世紀（室町・戦国時代）で館主は本吉氏（千葉氏）とされる³。これについては後述、検討したい。仙台藩領内の城館1,350余を



第1図 朝日館跡の位置

（ベース地図出典：国土地理院 <http://www.pref.miyagi.jp/bunkazai/map/index.html#12/38.660314/141.373615/>）

踏査した紫桃正隆氏より「葛西家の巨族（親族）、本吉大膳太夫の居城址だけに、その陣地の堅固さ、配置の精妙さ、そしてスケールの巨大さはただ眼をみはるばかりである。」と評される名城である。

安永三年（1774）の『志津川村御用書出』⁴に「志津川村という村名の由来は、古館朝日城の下に清水が湧き出るところがあるということにちなんでつけられたと伝えられている」（意訳）と書かれているように「志津川」の地名の由来にも結びついており、現在でも朝日館跡北麓では清らかな湧き水が認められる。

旭館跡（朝日館跡）として遺跡登録され⁵、範囲は南北約600m、東西約450mに及ぶ。南北二つの山塊に分かれ、地元では「朝日館」と呼称するのは谷を隔てて南側の山城であり、主郭、副郭、腰郭、帯郭、土塁、虎口、通路など戦国期山城に伴うと考えられる地表に凹凸として顕れている遺構（以下、「地表顕在遺構」と表記）の保存状況は一部を除き、極めて良好である。地元民から北側の山城跡は「古館」（ふるだて）と呼ばれている⁶。

城館主については、延宝年中（1673－1681）仙台藩より幕府へ書き上げたとされる『仙台領古城書上』⁷には「清津川村 町」「山一 朝日城 同（東西）二十六間 （南北）三十五間

城主千葉大膳太夫季次。」「二ノ丸 同四十間 三十八間 三ノ丸 同四十六間四十間」とある。また、前掲『風土記御用書出』（安永三年1774）では館主として藤原秀衡の四男元良四郎高衡、その没落後は葛西氏の家臣、千葉大膳太夫重次とある。藤原高衡については12世紀の人物であり、伝説の域をでるものではないにしても、奥州藤原氏の沿岸域を管轄する施設が志津川地域の微高地や丘陵域にあった可能性はあると考えている。いずれにしても伝説のもと、藤原秀衡の四男の高衡が「本吉冠者」と呼ばれ本吉荘を管轄した⁸ことによると考えられる。また、千葉氏については、『宮城県姓氏家系大辞典』（1994）⁹などを参照すると以下のである。下総国の平姓千葉氏が奥州に下向し、北上川流域一帯に栄えた。本吉氏はその千葉氏の分流とされるが、朝日館の戦国期の館主は葛西太守満信の子重信が分立し朝日館に移って本吉（元良）氏を称したとされ、永正年間（1514－1521）ころに本良荘（志津川町）朝日館に移ったと伝えられる。永正八年（1511）、葛西宗晴が山内首藤氏の反乱を征するため、元良播磨守春継を総大将にしており、元良氏は葛西一族でも最有力者であった。天正18年（1590）、豊臣秀吉による奥羽仕置軍を迎え、元良大蔵少輔胤正とその子常陸介胤遠は、佐沼城（登米市）で、



第2図 朝日館跡
（東上空から 右が「古館」 撮影：針生芳知・佐藤泰）

討たれたとされる。

本吉氏の菩提寺とされる大雄寺の朝日館を眺望しうる墓地には、「良元正鉄大居士 文禄元辰天（1592）八月朔日卒」と刻まれた最後の館主元良重継の墓と伝えられる石碑がある。地域史研究の先達である佐藤正助氏の見解では、銘文の様式などから江戸時代に入ってからのもので、戦国期城館主の事績を伝える石碑として重要であり、「大雄寺の古碑」として南三陸町指定有形民俗文化財となっている。現在の南三陸町公式HPでは「碑文の彫り方の特徴や、この地方で墓碑に居士号を用いるようになった時期などから考えて、大雄寺が再興された享保年間（1716～1735）頃、旧主を顕彰供養した記念の碑」（南三陸町バーチャルミュージアム）とされる。

3 現況調査の目的と方法

現況調査の目的は、戦国時代において志津川地域の統治拠点となり、近世に語り継がれ、現代においても親しまれてきた朝日館跡について、東日本大震災発生から五年目となり、復興まちづくりが懸命に実施されつつある現在において、その現況を確認し、改めて、その歴史的

価値を検討することにある。そこに至る契機としては津波復興拠点整備事業に伴う中央地区造成で消滅した新井田館跡への鎮魂と郷土の歴史文化遺産の保護・活用に向けての周知の必要性を切実に感じたことにある。

現況調査の方法としては、従来の研究成果物には略図は記載されているが、全体の縄張図は作成されていなかったもので、縄張り調査、すなわち、縄張図と呼ばれる防御機能に注目した平面構成図を作成しつつ、現況を観察し、写真を併用して記録した。縄張図のベースは『歴史の標 志津川町誌Ⅲ』（1991）¹⁰ 所載の「朝日館地形図」をベースとしているので法量的に大きな誤差はない。距離計測は、レーザー距離計を採用したが、専らゴルフなどで使用される安価携帯用のものを使用したためか、実際は、目的物途中の枝葉を捉えてしまうため難渋し、歩測を併用した。写真撮影については、特徴的な地表顕在遺構を主に撮影した。館全体の様子や立地を表現するためドローン撮影も実施した。これについては針生芳知氏（仙台市科学館ボランティア）、佐藤泰氏（元せんだいメディアテーク副館長）に依頼して静止写真と動画を撮影していただいた。

縄張図作成の方法は、東北地方城館研究の第



第3図 朝日館跡

（西側上空から志津川湾を望む 谷を挟んで左は「古館」 撮影：針生芳知・佐藤泰）

一人者の室野秀文氏より基本的方法をご教授していただいたが、生来の不器用と老齢のため縄張図の精度はそう高くはない。また、本館が広域で遺構密度の極めて濃い城館跡であり、さらには、震災などにより管理がままならず、土地利用も変化し、真冬であっても刈り払いをしなければ入りこめない地域が各所にあり、地元の方たちの親切なご案内をいただいたものの、現況調査は概要的の把握にとどまった。したがって今後の本館の活用、例えば歴史公園化にあたっては、事前に全域の刈り払いや精度の高い記録方法によるさらなる現況・確認調査が必要である。本稿が今後の精密な調査と新生南三陸町における歴史的憩いの場、子供たちの教育的活用に向けての整備に向けての一つの礎と成りうれば幸いである。

4 周辺の地形と歴史的環境

朝日館跡は、志津川湾に流れ込む水尻川の河口から約1.2km 上流、水尻川と保呂毛川にはさまれた丘陵に位置し、志津川湾を眺望しうる場に立地する。中世には湾口が入江状に館近くまで入り込んでいた可能性がある（『歴史の標』1991）。水尻川北岸の小高い丘陵に立地する中瀬町地区では10数基の板碑が確認され¹¹、「おたまや」の地名とともに寺院故地伝承が残る（『歴史の標』1991）ことから、中世には、一帯は寺院や居住区が形成されていたと考えられる。現在、南斜面域は、おたまや遺跡として登録されているが、戦国期には小高い地域の平坦部を中心に、小城下の一画が形成されていた可



第4図 朝日館跡空中写真 1969年（国土地理院MTO694XC6-12より）

能性がある。

志津川地区の城館跡は志津川湾岸から3 km ほど内陸にある盆地状地形の入谷地区に集中するほか、湾岸とそこに至る主要街道や水系の節点に数 km ごとに合わせて24ヶ城が分布しており（『歴史の標』1991）、中世後期における志津

川湾域の重要性と緊張関係を物語っている（後述）。これらの城館の中でも本館は最大規模の城館跡であり、奥州有数の戦国大名である葛西氏の独立性の強い重臣で、志津川地区を中心として支配した本吉氏の居城にふさわしい規模と内容を示していることは以下の通りである。



第5図 朝日館跡（右側が古館） 大雄寺から西方を望む



第6図 朝日館跡（南側） 右側の最高部が主郭



第7図 朝日館跡（南東コーナー） 東日本大震災の津波は平地の民家を流出した



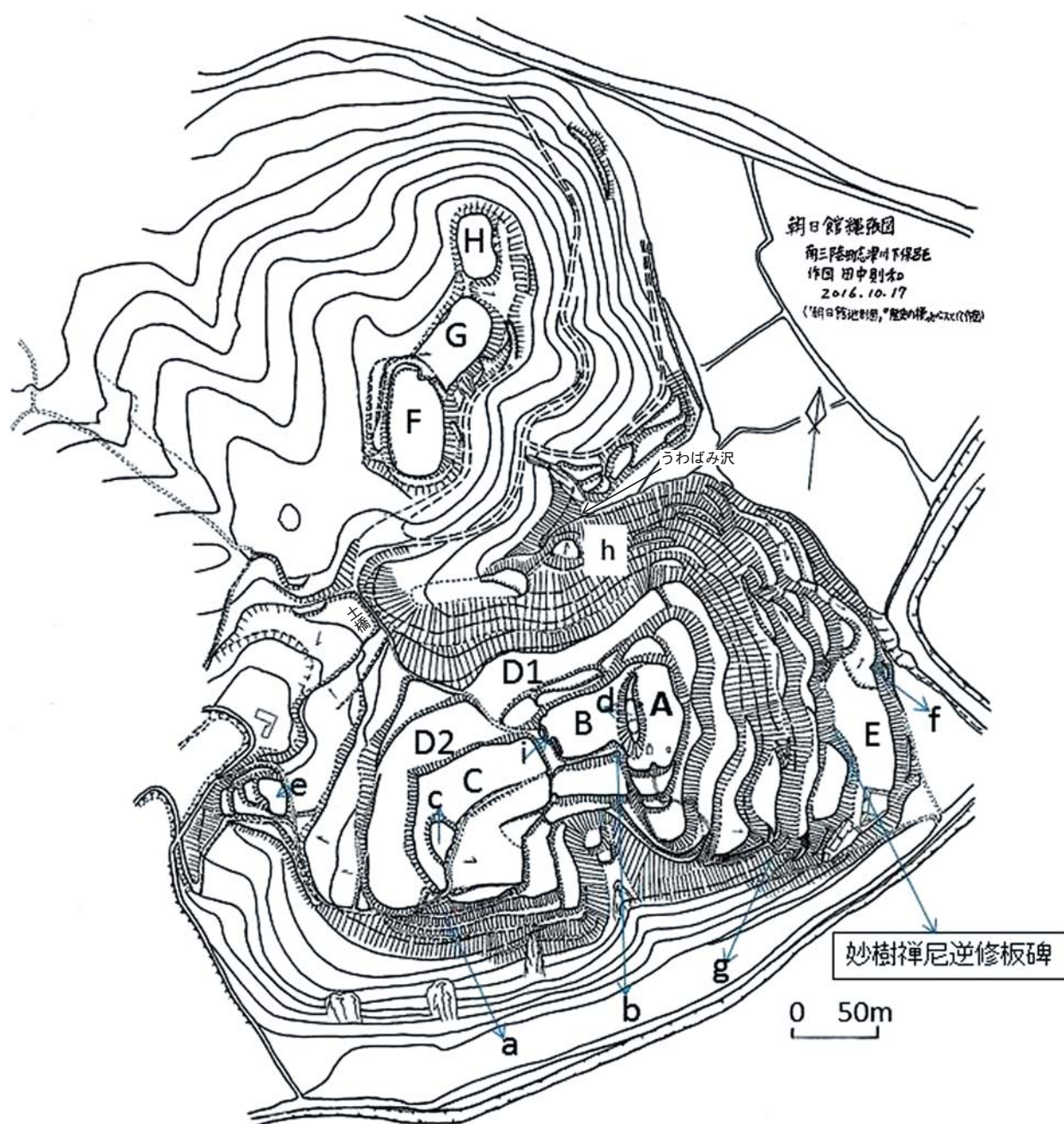
第8図 最下段郭Eから対岸を望む 右手に、おたまや遺跡(小高い丘の水尻川側)、荒島が見える

5 縄張り

(1) 朝日館跡（南側部）

朝日館跡は東西に走る谷により大きく南北に分離した山塊に立地する。その地表顕在遺構の分布は大きく異なり、とりわけ、防御された平場（「曲輪」・「郭」（くるわ）、以下、「郭」の名

称で記述する）は、南側の山塊上部にいくつもの広い郭が集中している点が特徴である。便宜上、地元で呼称する朝日館跡（南側の館）と「古館」（北側の館）に分けて記述する。以下、南側の館から記述する。各主要郭には大文字のアルファベットをふり、それ以外の地表顕在遺構には小文字のアルファベットをふって、縄張図と文が対応している。



第9図 朝日館跡縄張図（田中則和 2016.10.17）

① 大規模な郭

郭Aは最高位（標高約75m）にあり、郭Bは大土塁dを境として郭Aの西側に一段低い平場として位置する。境界の大規模な土塁（以下、「大土塁」）を除き、郭Aは最大値で約20×60m、同じく郭Bは約30×40mほどであり、単独ではこの大規模な館としては小面積である。そして、郭A・Bは大土塁により完全に遮断されているわけではなく南北両端を通路として通行が可能であり、地表観察としては郭A・B間の段差も通行に支障がない。郭A・Bは東側から南側にかけて腰郭、帯郭により幾重にも防御され、西側は土塁と堀切で防御されており、さらに北側は深い谷と対岸の「古館」により嚴重に防御されていることから「主郭」と考える。

なお、用語として「主郭」は、城館全体を統括する機能がかった場として空間的配置から推定される郭に対して使用しているが、それほど自明な場合は多くないものの、とりあえず使用する。全体的位置付けについては後述する。

主郭（A・B）は南北51m、東西70m（いずれも最大幅、以下同じ）、面積は約3,500㎡ある。大土塁（図示d、高さ約5m、最大幅約16m、長さ約50m）は、状況からみて、山頂を削り残

して造られたと考えられる。頂部が平坦化されており、標高約80mと本館跡の最高所となることから見張り台兼防御機能及び風除け¹²の機能が想定される。東側の郭の土塁脇には井戸跡と考えられる窪みがある。地元民の話では数十年前には、満潮の際、水を湛えていたとのことだが、高所であることから、にわかに信じがたい話である。郭Bの西側には喰違い土塁によって防御された堀底からの坂虎口がある。

次に、主郭の西側に堀切りをはさんである郭C。郭Cは主郭より一段低い郭である。主郭よりもさらに大きく面積は4,000㎡近い。南側から西側にかけて腰郭と帯郭で防御されるが「主郭」ほど嚴重ではない。主郭に準じる内容として「副郭」と考える。西端には小山状の小郭（c）があり、約15m四方の平坦面を持ち、西方が一望できるので見張り台と考えられ、櫓が存在した可能性がある¹³。なお、津波で失われた大雄寺門前の杉並木が描かれているので近世以降の作成と考えられる「朝日館古図」（佐藤正助『旭ヶ浦物語』（1975）及び『歴史の標』（1985））では、「城主の古墳のヨシ（由）」とされ、現在は祠が祀られている。現土地所有者の話では上山八幡宮を分祀したものであるとい



第10図 主郭（パノラマ合成写真）



第11図 主郭 旭館観音堂、大土塁（パノラマ合成写真）



第12図 「朝日館古図」(南三陸町教育委員会)

う。現在、「最後の城主」の墓碑は対岸の山上にある。破城後、城主の墓所となった可能性もある。南側の小道脇には、ほぼ埋められた穴が開いているが、近年の貯蔵施設とのことである。

副郭の南西端には石積みを伴う虎口がある(後述)。そして、副郭の一段下の西側から主郭の北側にかけては、幅30m前後の平坦地が段差を持ちながらも取り巻く長大な郭Dとなっており、主郭と副郭の間の堀切の延長で二分されている。前述の「朝日館古図」では、「三之丸」と表現されている。主郭以上の規模を持つ副郭が城主に近い地位を持つ一族の居住空間とすれば、この長大な腰郭は、重臣、戦時の援軍、職人に至る種々の階層職種者の長期滞在が可能な区域と考えられないだろうか。このように主郭、副郭、郭Dと約2万㎡近い平坦な居住可能区が造り出されているのが南側の山城の大きな特徴となっている。

そして、地表観察では北側の「古館」、あるいは北西方向への山道に抜ける堀底道は、本来は深い堀切と考えられ、A・B、D1郭群とC、D2郭群の二大ブロックに大別すると、城主ブロックと城主に準じる地位のブロックの存在がより浮き彫りにされると考える。

郭Eは高所中央部の郭群から大きく離れて、東南部最下位にある広く平坦な郭である。北部東縁のえぐり部(f)は、その直下にいわゆる「虎口受けの平地」といわれる小郭を伴い、登ったところの右手一段高見に小郭があり、横掛りの防御がなされていることから郭Eへの虎口と考えられる。その小郭の左手の山側斜面にはえぐり状のへこみがあり、通路痕跡の可能性がある。南部の一段上の平面台形状の腰郭も防御や関連施設など一体的機能も考えられ、その上段の狭長な帯郭群も郭Eに対する防御機能が考えられる。

郭Eの下方には水尻川が流れており、当時は、志津川湾に直結していたのではないかと考えられる。この郭の性格としては城主が軍事的緊張の弱まった時期の居館機能や海上交通や街道把握の管理機能あるいはこれらを合わせた機能が考えられる。なお、この郭の山際には南北朝期の至徳二年(1385)に妙樹禅尼が造立した逆修供養石塔(板碑)があり、本吉氏来住以前かと考えられる有力武士一族の存在を物語っている(後述)。なお、郭Eの下段には現在の水尻川から一段高く平面、三角形の平坦地がある(遺跡登録範囲外)が、郭Eと関連して、志



第13図 朝日館跡 青屋根の小屋のある平場が郭E

津川湾に接続する荷揚げ場の機能も考えられる。

これらの主要郭と文献との対応関係についてもふれておきたい。延宝年中（1673－1681）仙台藩より幕府へ書き上げたとされる『仙台領古城書上』には「清津川村 町」として「山一朝日城 同（東西）二十六間 （南北）三十五間 城主千葉大膳太夫季次。」とあり、山城とされる。さらに「ニノ丸 同四十間 三十八間 三ノ丸 同四十六間 四十間」とある。仙台藩における一間は1.97mとされている¹⁴ので、試算すると本丸51m×69mとなり東西南北が逆転するものの現状の主郭規模60×80mにやや近い。

同じく「ニノ丸」は主郭の西側にある広い副郭とみられ、換算すると79×75mとなる。L字形を呈しているので計測の仕方にもよるが東西南北軸の最大長をとって90×75mとなりこれもやや近い。「三ノ丸」は最も広大で換算すると91×79mであり、数値的にはむしろ現状観察から副郭に匹敵する。あえて候補をあげれば東側下段の広い平場を等高線を勘案し、山側の平場を含めて南北90m前後東西50mとなる。規模的には、大きな沢を隔てた北側の「古館」の主郭が腰郭を含めて南北80m×東西50m前後とこれに近い。また、『仙台領古城書上』の享保13年（1728）の写本とされる『仙台領古城書立之覚』の「清水川村」では、「三ノ丸」について「同一六間 同四十間」と前者と比較すると東西規

模の「四」が脱落しているのであるが、換算して32×79mという規模は、ちょうど東側最下段の郭Eの面積に相当する。なお、安永三年（1774）志津川村「風土記御用書出」には「町南西一朝日館」として「高サ 二百五十間程 南北二百三十間 東西百五十間 御館主ハ藤原秀衡御四男元良四郎高衡御住居ニ御座候處御没落以後葛西御家臣千葉大膳太夫重次と申御方御住居之由申伝候當時ハ畑ニ相成居申候事」とある。

② 主要郭群の防御に関連する腰郭・帯郭群

これらの主要郭群の防御に関連すると考えられる腰郭・帯郭群は、斜面部に多数分布している。特に主要な郭である郭Aと最下段の郭Eの間の東側急斜面や主郭、副郭の南側斜面上部に集中している。中でも幅1～10m程度の狭長な帯郭群により東部を主体とした急斜面部に集中することは、広大な郭が収容する多数の兵の存在を考慮すれば、館の東から南側の急斜面を自在に兵が移動、敵からの攻撃に対処することを可能とする機能があるのではないだろうか。

また、前述の西側虎口より山腹に沿って湾曲した道が谷側に降りていくコーナー北側、丘陵西側突端部の郭eは、郭の谷側に幾段もの帯郭が設けられ、南方から西方方面からの侵入者に高所から最も早く対処しうる郭となっている。この郭の北東辺から副郭の間は、うわばみ沢から伸びる谷筋に沿い段差を持つ緩やかな傾斜面

が広がっており、兵の駐屯が可能な地区となっている、また、沢筋の対面である北側尾根筋（古館側）にも防御上、同様な帯郭の機能が想定され、その西端は民家となっている突端部に及ぶかと考えられるが宅地造成などのため詳細は不明である。

「古館」との間の通称「うわばみ沢」の東側は、とりわけ深い谷であり、これ自体が強い防御機能を持っていると考えられるが、沢沿いの侵入に対処する小郭が設けられている（h付近）。沢を進んだ突き当たりの左手上には腰郭があり、さらに沢際に沿って通路状の窪み、さらに西方に沢の南斜面を整形した平坦地があり「古館」にわたる土橋付近に達している。そして、沢の入り口にある「古館」側の平場群も現代の果樹園、林道により変形しているものの、沢からの侵入に対しての防御のための腰・帯郭群であると考えておきたい。

③ 西側虎口

防御された主要な出入り口である虎口について特筆されるのは、石積みを持つ西側虎口である。本年の補足踏査に際して土地所有者の立会いにご教示をいただくことができ、西側虎口前の弧状を描くもスムーズに登っていく現状の小道は、桑畑などの経営に便利のように曲折した道を最短距離的に開削したものであることが判明した。本来の道は、石積みの手前から左手の山側に大きく曲折してから副郭の西南コーナー

に沿って湾曲する石積みに沿いに進路を北方向に変えていくこととなる。その右手には、大小の礫の集積があり、ここに南面に石積みを持つ土塁が築かれていたとすると石積みを持つ喰い違いがあり、喰い違い部に門が埋み門的な形で付設されていた可能性もある。全体的にみると、攻撃側を左へ、そして右に曲折させて（第15図③）横矢を掛けるようにしている。

現在、石積みが露出している範囲は幅約1.6m、高さ約1.07m、石材は砂岩もしくは安山岩に近似しているが、風化や汚れもあって筆者の知識では確定できない。確認できるのは四段である。左上半は落とし積みの様相を示しており、本来の姿を失い、積み直されている可能性が高い。右手も現存の下から四段目は手前にずれている可能性がある。石使いは基本的には長辺を横にしているものが多いが、下段はむしろ縦使いが多い。目地は現露出範囲の中ほどに横目地が通るかのように見えるが、凹凸があり、縦石で止まっている。築石は粗割石で間詰め石が下二段で用いられている。上二段の間詰め石は外れてしまっている可能性がある。築石の大きさは原位置に近いもので縦11cm、横17cm程度のものから縦31cm、横56cm程度のものがあるが、縦使いの石は、埋没しているため計測できなかったが、47cm以上はある。付近に落下している割石には一辺1mを超えるものがあり、ところどころに巨石を用いて虎口の装飾を意図していたのではないかと考えられる。ただし、

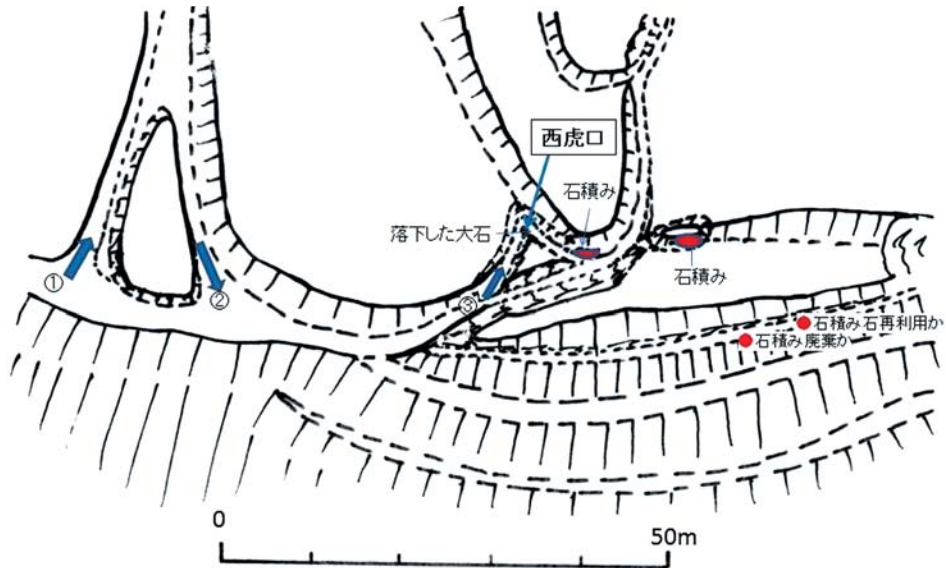


第14図 西側虎口（内側から見る）

石積みの角度は保存のよいところで87度を図り、郭の平場の上端まで現状では、3 m程度なので最大限の石積みの高さもこの程度と考えられ、土留めが基本であったと推定される。背面構造は不明であるが、この石積み付近では裏込

め石と思われる砂利は見られない。石積みはさらに側辺に沿って埋没していると考えられるので確認調査を実施すれば、構築方法や年代の手がかりが得られると考えられる。

道の右手の副郭南面の土塁状高まりの下部に

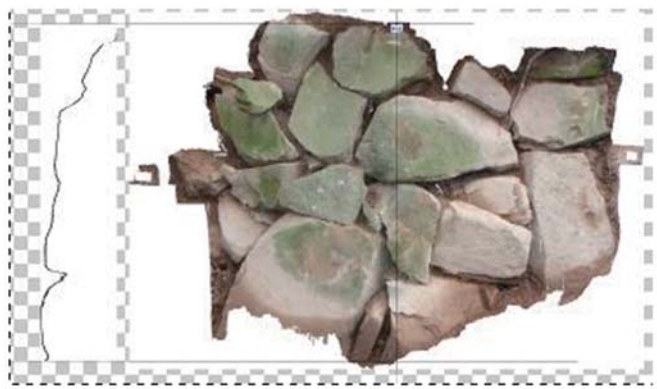


朝日館跡西虎口付近縄張図

2016.10.18田中則和



石積み



石積みオルソフォト (株CUBIC提供)



石積み (上方から)

も石積みが崩壊したかと考えられる大小の石が積み重なっている（第16図・付表2）。石は大小38個を確認したが、原位置もしくは原位置に近いものは、築石1のみである。築石1以外でまとまった大きさをもつものは長さ35～42cm程度のものが3個であり、他はより小さく、こぶし大のものも多いので、裏込めがあった可能性もある。この石積みの下方の山腹をめぐる小道には、石積みの廃棄されたものや転用されて補強された近年の石積み（第32図）が確認され、本来の石積みボリュームが相当大きかったことがうかがわれ、戦国期城館の正門であることも考えられる。また、廃棄、転用の様相からは、近年の桑畑経営に伴う道路開削ばかりではなく、破城の際の対象となった可能性も考えられる。

将来の史跡整備のためには、現状の正確な平面図、立面図を経て確認調査が実施され本来の虎口構造が確認されることが望まれる。

向かって右方斜面には、中央部南側の沢の西側沿いに形成された帯郭状の段が三列ある。このうち、上から一段目の帯郭状段については、土地所有者の証言では近年に山腹の畑への近道として付けたとのことであり、補強に石積みの一部が転用され、幅も1m前後と細い。上から二段目の帯郭は幅が2～3mあり、南側山腹を迂回して主郭と副郭の間の堀切につながっており、当時の通路として用いられた帯郭と考えら

れる。三段目の帯郭は、虎口に入る前の曲折した道から連続しているようであるが（第15図②）、道をたどっていくと南面中央の大きな沢の手前で消えており、あたかも攻撃側の進路を攪乱するかのようである。

④ 主郭虎口

主郭への虎口は大土塁の南西隅の削り込み状を呈している箇所と考えられる。ここから急斜面を南方に下ると西方への堀底道（堀切）に接続するとともに、幾段もの腰郭沿いに曲折を繰り返しながら郭Eの南端方向に降りていく。現在、主郭にある観音堂への参道は、起点が民家に登る小道のため当時の通路とは考え難い。郭Eの虎口から登って民家の西側山腹付近の現道に接続する可能性が考えられる。ここでは斜面際に沿って土塁のあるものを含む極めて小さい小郭が道に添うように、しかも直交する東斜面沿いに連続的に分布する（g）ことから戦国期の防御された通路とほぼ重なっていると考えられる。途中からは参道と異なり、郭A南側尾根に三段に造りだされた腰廓の下張り出した狭長な腰郭（土塁を伴った可能性がある）沿いに前述の虎口に登ってくると考えられる。この場合の道は両側を腰郭に挟まれた厳重な防御のもとに主郭に達することとなる。

主郭B西辺の食違い土塁（i）は、堀切からの坂虎口と考えられるが、この主郭と副郭を隔



第16図 土塁状高まり石積み崩壊箇所

てる空堀の堀底道を北に下ると「古館」に至る土橋への最短コースとなり、反対側の南側斜面に下れば館の東西につながる帯郭による通路につながる。このように四方からの兵の出入りが可能であるとともに、主郭は土塁により防御された虎口を有し、さらに山腹の腰郭と多数の帯郭を連動させることにより機動的に兵を動かす配置となっていると推定される。

この館の外郭防衛ラインについて郷土史の名著『旭ヶ浦物語』（1971）年において佐藤正助氏は周辺丘陵の堀切など関連遺構の存在を指摘

しているが、現在では確認が困難な状況である。朝日館の直接的な外郭防衛ラインは、南は保呂毛川、東は水尻川、さらに現状の山腹の北東辺を巡る溝状落ち込みの存在からすれば、水尻川から引かれた堀による可能性が考えられる。

⑤ その他の道

朝日館の推定通路については、前述した通りであり、第17図に赤色で示す（破線は副線として位置付けている）。館から外部への出入りは、現水尻川が接している「虎口受けの平地」あた



凡例：赤色：推定通路 黄色：郭 橙色：高まり 茶色：切岸 黄緑：緩い斜面 藍色：堀

第17図 朝日館縄張図（赤色は推定通路）

りかと考えられ、当時は入江も近かったと考えられる。戦国期の正門の可能性のある西側虎口は、西部南端尾根筋を曲折して南側の小河川沿いの道に出る。問題になるのは、館の北西を走る山道であり、そのまま主郭と副郭を隔てる堀底道につながっており、南側中央谷からおりることも可能のように見えるが、極めて急傾斜であり、通常の往来は無理である。地形的には北西の緩やかな谷沿いに降りてくることになる。

「古館」方向にも分岐しているが、軍事的緊張時には街道としては使えない。実は、北西山道の東側の谷にもいく筋もの古道痕跡が見られる。館側にとっては、主街道が閉鎖されても北上川方面への通行は確保されるわけであり、間道的な道は、朝日館によって封鎖できることにもなる。

(2) 「古館」

次に「古館」(ふるだて)について説明の便宜上一つの山城とみなして記述する。範囲は南北約330m、東西約370mを計る。地表顕在遺構は最高部の中央部に三段に連続する郭(F・G・H)を中心に集中しており、山塊上部を大規模に造成した北側の館(狭義の朝日館)とは大いに様相を異にする。最高位にある平面形が楕円形のまとまりのある郭Fを「主郭」、北側

に連続して一段低く「主郭」より一回り小さい郭Gを「副郭」として記述する。すなわち、北東に伸びる尾根を造成した連郭式の山城で、南から最高位の標高約70mの主郭F、横堀を介して一段下がって副郭G。さらに一段下がって郭Hがある。副郭Gと下段の郭Hはその西側において尾根を利用したとみられる土橋状の高まりで結ばれている。

主郭Fは南北約65m、東西約35mを計り、南側が幅の広い楕円形を呈している。南側の館(狭義の朝日館)の「主郭」に比して一回り小さい。北東部には虎口と推測される窪みが入り込んでおり、郭の北東辺の横堀状窪みに連結している。また、ここから西側の縁辺には土塁がめぐる。そして主郭の周囲には、西側から北側にかけて横堀状の窪みが認められる。さらに西側の土塁の西側には土塁状の高まりが認められ、その西側一段下には帯郭が認められる。南側では尾根を削り出して土塁状の高まりを造っている。主郭南側の一段下には腰郭がめぐっている。総じて西側から南側に防御を固めている。これは館の南西部の谷沿いに山道が走っていること、前述のように主郭Fに隣接する浅い谷にもいく筋もの古道痕跡が認められることから、山道や谷沿いに敵が攻めてきた場合に備えて防御を固めているからではないかと考えられる。



第18図 「古館」(手前は土橋)

副郭Gは南北約45m、東西約30mの北東の隅が丸い長方形を呈している。北東辺には、弧状の郭ラインに添うように横堀状の窪みが認められ出入口に関わると考えられる。また、東縁中央辺に窪みがあり両辺に小帯郭を伴い虎口の可能性があるが、林道（縄張図の破線）による破壊により詳細は不明である。

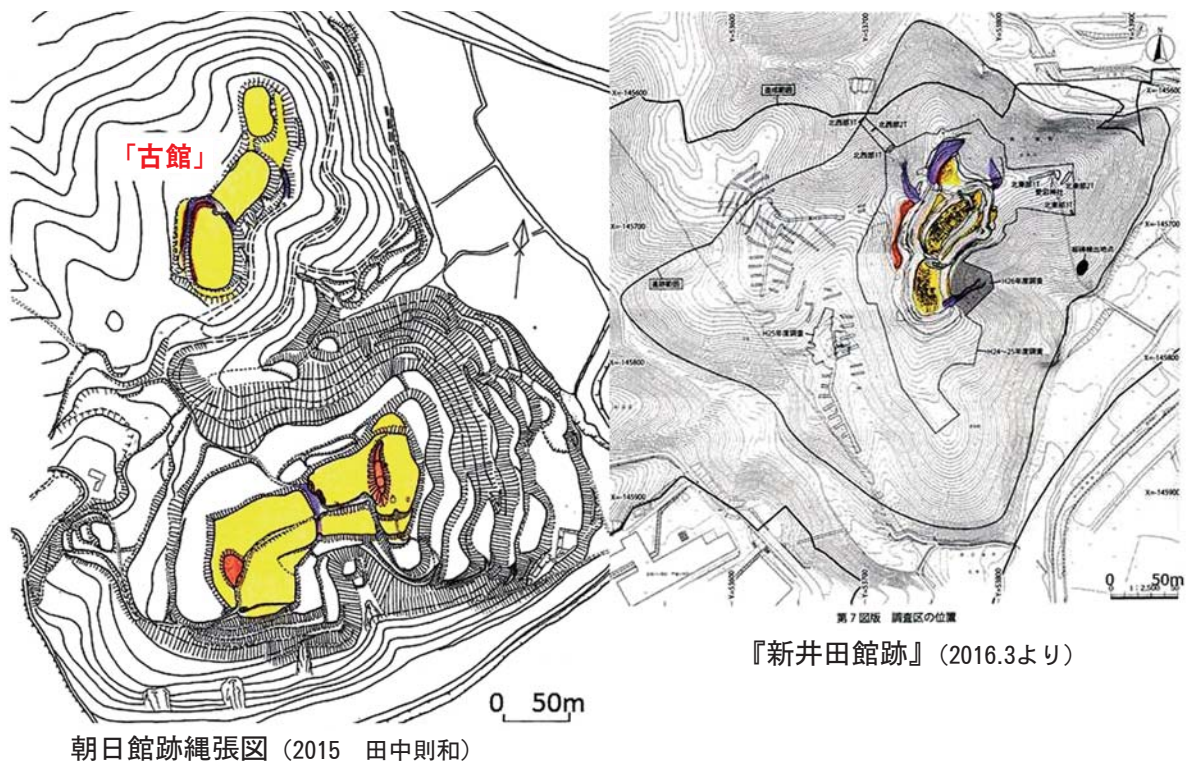
副郭Gの北側、一段下に郭Hがある。尾根筋を削って造ったと考えられる土橋状高まりで結ばれた隅丸長方形の平場は南北約35m、東西約23mほどである。その東から南には腰郭が巡るが平坦化は不十分である。主郭と副郭の東側下段には腰郭または帯郭の残存が認められるが近年の林道と崩壊により下辺を失っていると推測され、本来の姿は掴み難い。いずれにしても南側の館（狭義の朝日館）のように東斜面に密に帯郭・腰郭を配してはいない。南側の館との谷際の東端部に階段状の平場が存在するが、構成の果樹園造成などで損壊、変形している。東側谷筋から入る敵に備えたものと考えられるが、南側の館のように頂部の主要郭群に連続して腰郭、帯郭を形成していない。「古館」を全体的にみれば主要郭の規模は南側の館より格段に小規模であり、南東部谷筋を除き、斜面部に遺構はほとんどみられない。

主要郭を土塁と空堀で防御し、斜面部の造作は通路以外はほとんど見られないという「古館」の景観に近似しているのは、2013年に志津川中央地区（津波復興拠点整備事業）建設のため全面的に調査され、消滅した山城の新井田館跡である。新井田館跡は遺跡登録されている範囲が宮城県遺跡地図によると東西約400m、南北約350mで谷に隔てられた一山塊の大部分を占めているが、発掘調査の結果、検出された遺構は、多数の建物の建つ主郭・副郭及び腰郭二箇所、帯郭二箇所等からなる遺構群が東西約100m、南北約150mに集中していた。一方、「古館」の範囲は、東西約350m、南北約320mほどであり、遺構群の大部分が、尾根筋を造成した東西約90m、南北約170mの範囲に集中している。山塊と尾根筋の主要郭を中心とした遺構集中部と空間構成において両者は近似している。

新井田館跡の調査成果を受けて、古館の本来の姿を想定すれば、尾根筋の最高位に設けられた主郭、副郭を中心にこれに接した土塁、空堀及び側辺の帯郭により防御されていると考えられる。新井田館跡の年代は、15世紀前半には築城され、16世紀に及んだかと考えられるが、少量出土した瀬戸美濃など陶磁器の年代は前者であり。山上の遺構配置の特徴は15世紀代の少なくとも当地域の一特徴の可能性が高い¹⁵。なお、新井田館跡は出土した在地系陶器や山腹下段に平場を造成した小規模板碑群の存在などからは、14世紀において有力者の居住空間が丘陵部に存在した可能性はある¹⁶。したがって「古館」もまた15世紀的特徴を有しているのではないかと考えられる。正確に言えば15世紀的特徴を残したまま16世紀にも館として機能していたと考えられる。

6 検討——「朝日館」と「古館」

南側の山城（狭義の朝日館）は、「古館」とは様相を異にし、最高位を中心とした主郭、副郭及び腰郭群が長軸約200m、短軸約100m（最大幅）の範囲に段差を持ちながらも広大な居住、滞在が可能な郭を造成するとともに山腹に多数設けられた帯郭群などにより機動的に兵を動かしうる防御態勢をとっている。このような館の地表顕在遺構の構成は、天正14（1586）年には、隣国の馬籠氏と争い主家の葛西氏の制裁を受けるなど本吉氏のおかれた軍事的緊張状態を反映していると考えられる。また、空間構成については、松岡進氏が戦国期城館の中で「戦国期の領域の中核であったBタイプ」即ち、「山丘全体に大規模に築城した複郭のもの」（松岡進『戦国期城館群の景観』2002）¹⁷で、斜面下部に臨時的利用のできるスペースを持つ類型に該当する。このような地表顕在遺構の表す年代としては、近世の在郷居館（要害）的利用履歴が認められないため、天正18年（1590）の秀吉による奥羽仕置の葛西氏所領没収、天正19年（1591）佐沼城攻撃による葛西氏滅亡を下限としてよいと考えられる。なお「朝日館古図」は



第19図 朝日館跡と新井田館跡の比較

「天正年中・・・破城トナル」とみえる。確証はないものの「破城」という用語に着目すれば、あるいは、「良元正鉄大居士」碑が立てられた時期、近世前半期の可能性もある。

また、西側虎口の石積みは観察しうる範囲も狭く、東北の石垣編年も進展していないため年代の特定は困難であるが、天正18年（1590）ころ、朝日館と同様、廃城となったとされる福島県木村館跡の裏込め石のない、「レンガ積み状」と形容される石垣（『木村館跡』1992）¹⁸と大きな差異は認められない。虎口のみに石積みを用いる段階（中井均「織豊系城郭の画期」1990）¹⁹として16世紀後半の様相と捉えて大過ないと考える。したがって、石積みの年代は、葛西氏から分立したとされる本吉氏が移ってきたという永正年間（1514－1521）以降、天正18年（1590）までの年代幅と考えておきたい²⁰。

戦国期における「古館」は、南側の館（狭義の朝日館）とともに機能していたと考えられ、谷部の入口に防御用の帯郭が段状に設けられたと考えられるほかは、山上の主要郭は地表面観察上は、顕著に戦国的形態に改変されていない

ようである。15世紀的特徴をよく残しているということは、南側の館が戦国期の中心であると考えられる。その場合、「古館」の機能をどのように考えたらよいのであろうか。それなりにまとまった広さを持つ郭が「主郭」＋「副郭」＋腰郭として存在することからすれば、旧城主もしくは有力一族の隠居城とか有力家臣の居住・滞在とか援軍の有力一族の居住・滞在などが考えられる。いずれにしても南側の館（狭義の朝日館）が中心となり、それと一体的かつ臨時的に機能したと考えられる。なお、観音堂祭主の伝承（後述）では、「古館」が「本館」、現在地元呼称の朝日館が「前館」と呼ばれており、「古館」が本来は中心的要素を持っていたことを暗示している要素もある。

先に主郭と副郭の一定の独立性を指摘したが、「古館」を加えれば三ブロックの一定の独立性を有する居住可能空間が存在することとなる。具体相は不明であるがいずれにしても三ブロックが戦国期において一体的に運営されていたと考えられる。

7 現況調査のまとめ

今回実施した現況調査は、現存する地表顕在遺構を対象とするいわゆる縄張り調査で、現況は館の最終使用年代と考える16世紀末の姿を反映しているものと考えられる。

居住可能なまとまった形と面積を有する平場である郭A・B・C・D・E及びF、G、Hに着目すると、Ⅰ：主郭域（A・B+D 1+E）、Ⅱ：副郭域（C+D 2+e）、Ⅲ別郭域（F+G+H）の三つのブロックそれぞれの中核域（リーダーの居る場所）が土塁、堀、切岸、見張り台などの防御装置により一定の自立性を持ちながらも、最も防御に優れた主郭居住者により指揮された広大な館空間となっている。

このような構成と大規模さを持つ城館は、南三陸町域では朝日館跡のみであり、戦国期における「葛西氏の郡主クラスの重臣」（『宮城県姓氏家系大辞典』）という本吉氏の位置にふさわしい様相を示している。佐藤正助氏の『旭ヶ浦物語』（1971）²¹では、「黒崎千葉氏の古文書の中に旭館には中館居住の千葉甚七郎と小館居住の千葉民部が居た」としている。黒崎千葉氏の居館は朝日館跡の東南約3kmの志津川湾を眺望しうる絶景の地として知られる黒崎館跡と推定される。前掲書の朝日館主の奥方が実家であろう黒崎で落城の際に涙を流した奥州露の松伝説にも登場している館である。「小館」は見張り台と想定した地元では小山に対する名称と現在はなっているがC区全体に相当する可能性もある。前述の独立性のあるⅠ、Ⅱ、Ⅲブロックに複数の本吉氏、千葉氏が居住していた可能性に対応しているのかも知れない。紫桃正隆氏は、千葉氏の城館である朝日館に戦国期に葛西満信の子重信が分立し朝日館に移って本吉（元良）氏を称したとされることから、朝日館に千葉氏と本吉（元良）氏が居た可能性を示しており²²、このようなパターンを朝日館跡の特徴的な地表顕在遺構の構成に反映していると考えられることもできる²³。

全国的にみても室町期築城の城館（「古城」）

と戦国期の城館（南側の山城）が並列し、戦国期には一体的に機能していくと考えられる事例が保存良好な状態で残っていることは、貴重である。以上は仮説を多く含むものであり、本館の実相が、将来の発掘調査（確認調査）によって検証されることであることを期待する。

8 妙樹禪尼造立板碑と城館の開始期について

南東部最下段の郭Eの山際に立っている板碑は、南北朝時代の至徳二年（1385）に妙樹禪尼によって造立された逆修（ぎゃくしゅ 生前に死後の冥福を祈って仏事を行うこと）の板碑である。当時は「石塔」と呼ばれていたことを願文に含み、その経緯を語る稀有の板碑である。上部に地藏菩薩を表す梵字（種子）イ、その下に地獄に落ちない効果などがあるとされた光明真言、最下段に願文を刻む。石材は頁岩とみられ、井内石に近似する。

願文の一行目は、「菩薩戒弟子妙樹禪尼涓取」で「妙樹」のみ草書体となっている。二行目は「至徳二年八月十九日逆修」、三行目は「善根造立一基石塔以莊嚴」、四行目は「二世報地伏願變五障身」、五行目は、「即到无垢受一生記頓証」、六行目は「菩提」である。銘文の文字配列は紀年銘も含めて一つの文章として構成されている点は本来の願文に近い例として貴重である。全文は「菩薩戒弟子妙樹禪尼涓取至徳二年八月十九日逆修善根造立一基石塔以莊嚴二世報地伏願變五障身即到无垢受一生記頓証菩提」となる。読み下しは、「菩薩戒の弟子妙樹禪尼、至徳二年八月十九日を涓取して善根を逆修す。一基の石塔を造立し、以て二世の報地を莊嚴す。伏して願わくば、五障の身を変じ、即ち無垢に至り、一生の記を受け、頓（すみや）かに菩提を証せんことを。」としてみた。意識を試みれば、「（仏になるための）戒律を受けて仏道に入った妙樹禪尼は、至徳二年八月十九日（という良き日）を選んで、逆修の善根として石の塔婆を一基造立する。（生前に葬儀をして）塔を立てるという功德により、（仏道修行者が）

現世と来世にいくところを莊嚴して、仏になれない障害の身を変じて無垢となり、速やかに悟りに至るという約束を得られることを伏して仏に願います。」と地藏菩薩を供養して願いをかけているものと考える。

この板碑は、一般的な「右志者為過去悲母聖靈往生極楽也」などとする短文の願文の板碑の銘文構成と異なる。言い換えれば、定式的な願文を越えて、菩薩戒を受けた妙樹禅尼の五障を克服して悟りを得たいという逆修「石塔」造立の思いを込めた願文とした稀有の板碑であり、南北朝時代の南三陸地域²⁴の宗教的状況を伝える重要な板碑である。

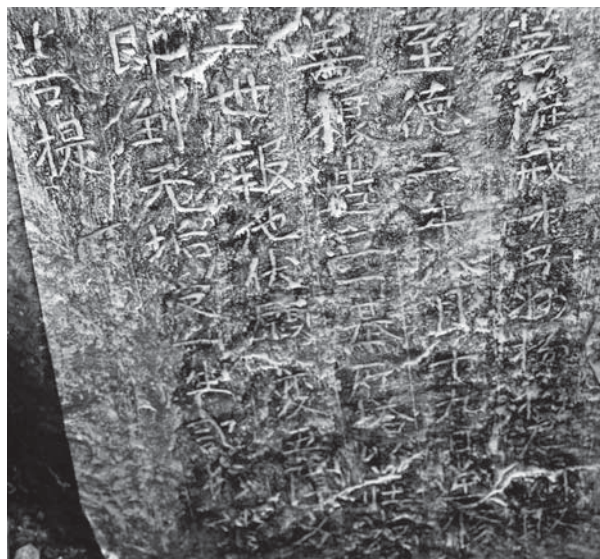
朝日館の成立年代は、発掘調査を経ない限り確定できないが、本文でふれたように南側の館域の16世紀的特徴、北側域（古館）の15世紀的特徴、新井田館跡の発掘調査成果（南三陸町教育委員会『新井田館跡』2016）を勘案し、妙樹禅尼造立板碑の年代である至徳二年（1385）段階で、大雄寺境内の大型板碑二基の存在も考慮

すれば、朝日館跡から大雄寺にかけてのエリア付近が、「館」と名付けられるものかどうかは別として、すでに地域有力武士の拠点であったと考えた方が自然である。逆修板碑であることを考慮すれば、この地を墓所あるいは寺院の一角と考えるよりは、有力武士居住地の一角と考えられる。14世紀後半段階の武士の屋敷跡の様相は不明な点が多いが、例えば、観応元年（1350）の岩切城（現仙台市・利府町）における足利尊氏派と直義派に属する奥州探題の合戦は著名である。この場合はふだんは微高地に立地する屋敷に居住し、軍事的緊張が増した場合や最終的な合戦は山城を用いていると考えられる。したがって、ふだんは、朝日館跡の麓周辺の微高地に居城し、軍事的緊張の高まりに応じて背後の主郭付近を利用したことも考えられる。妙寿禅尼造立の板碑の現在地は、ふだんの居住地としてはうってつけの場所と考えられる。志津川湾口に近く、かつ、志津川湾への眺望がきくこの場所は有力武士の差配する交通、交易を差配する拠点であり居住地としてとしてふさわしい場所として、南北朝時代にはすでに位置付けられていたのではないだろうか。隣接する大雄寺境内の有力武士と考えられる応安四年（1371）銘「平甲州廣蓮（連）」は、まさにそのことを物語っている。

このように、朝日館跡から大雄寺付近を中心



第20図 妙樹禅尼造立板碑



第21図 妙樹禅尼造立板碑願文（拓本）

とする水尻川下流域は、南北朝時代から戦国時代に至る志津川地域の拠点的な地域であり、震災津波で甚大な被害を受け、復興に邁進する南三陸町にとって最も歴史を語りうる地域として、新しいまちづくりの中での青少年教育、心の拠り所として歴史公園化など積極的活用を図るにふさわしい場と考えている²⁵。

9 旭館観音堂・旭館神社について

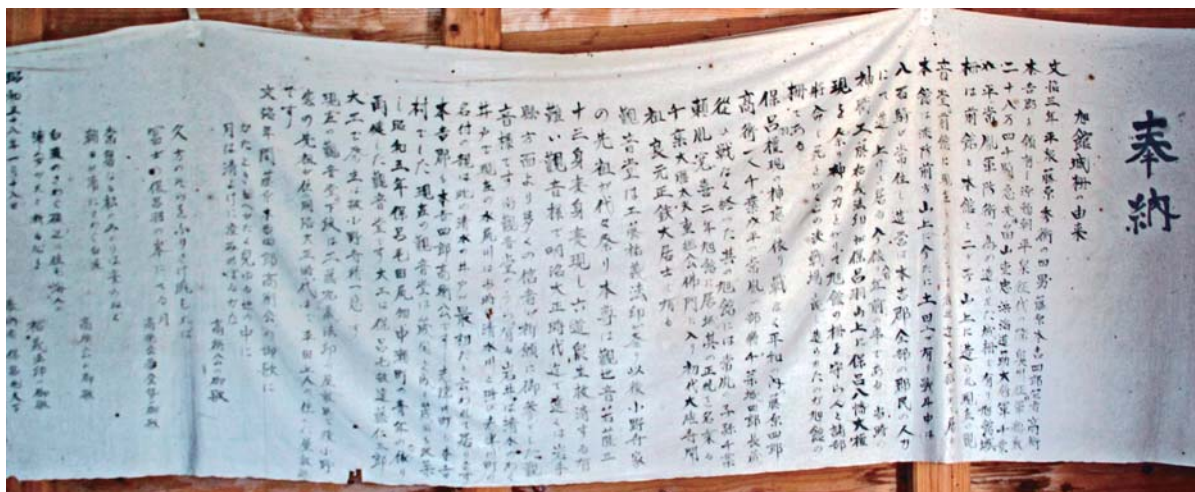
現在、主郭に鎮座する仏堂・神社について朝日館について関係してくるので、記しておきたい。佐藤正助氏の郷土史の名著『志津川物語』（1985年）では、「旭館神社」として祭神は大宮売神・大気都姫命であり養蚕の神様とされている。確かに昭和6年（1931年）の「志津川町鳥瞰図」²⁶には「旭館」の頂部に鳥居が描かれている。大宮売神は、宮中の祈祭神、大気都姫命は穀物と養蚕を掌る女神である²⁷。

一方、近世以降と考えられる「朝日館古図」（『歴史の標』所載）の「本丸」には「クワン ヲン 黄金佛」と書かれている。また、「山ノ神」と読み取れそうな文字も見られる。また、紫桃正隆氏の『史料仙台領内古城・館』（第二巻）では、本丸に観音堂が建つとしている。当該箇所には該当箇所に「旭館観音」と説明がある。現在、本丸跡には大小二つの堂・社があり、旭館神社と旭館観音に相当するとの考えもあり

うるが、荒廃した小社は狐の置物が残存しているので、稲荷神社の可能性が高い。

本年4月、管理者の大雄寺のご許可をいただいて堂内を拝観させていただいた。入って右手に「奉納 旭館城柵の由来」と題した幕が掲げられている。日付は昭和58（1983）年で奉納者と祭主名が末尾に書いてある。本文を読むと、保呂毛地区の某家に伝承された内容と考えられる。朝日館跡についての記述で興味深いのは、現在、地元で呼称している朝日館を「前館」、古館を「本館」と称していることである。この名称だと「本館」の方が主城のような響きがある。また、「旭館」には、千葉常胤の子孫の千葉頼胤が寛喜二年（1230）に居城したとする。千葉頼胤は奥州千葉氏の祖として実証性はないが、伝承のパターンとして広く流布していることは事実であり、実際には遠島地頭北条氏の滅亡後、千葉氏が入来したと考えられている。（入間田宣夫 1996）²⁸。ただし、石巻市湊にある一皇子神社、弘安六年（1283）「平朝臣胤常」銘板碑の存在から千葉氏は、鎌倉時代後期には湊周辺に来住していると考えられる（七海雅人氏ご教示）ことは、南北朝時代の南三陸地域の有力武士の特定、由来を考える際に重要だと考えられる。

なお、奉納幕の文章中には「岩井は清水のわく井戸で現在の水尻川は当時は清水川と呼び志津川町の名付けの親は此の清水の井戸が最初だ



第22図 旭館観音堂奉納幕

と云われております。」として安永風土記に見える伝承を井戸に引き付けて書いている。ただし安永風土記では「朝日城下」の清水としている。「岩井」は大土塁の脇にある井戸状落ち込みを指しているとみられ、その名称の由来は、大土塁が盛り土造成ではなく、山頂の削り残り造成であることを反映している可能性がある。また、観音堂の由来としては、800年前に「工藤祐義法印」が祭ったとしている。「法印」という名称から修験系の可能性があり、可能性が高いのは破城後の祭祀であり、可能性が若干あると考えられるのは、館の持仏堂に由来する、もしくは家臣の持仏という経緯であろう²⁹。今後の課題である。

奉納幕の文章では、観音堂を創設した工藤祐義法印は保呂羽山上に「保呂八幡大権現」を祭ったともする。宮城県神社庁HPの保呂羽神社由緒には、「文治二年（1186、鎌倉）本吉四郎高衡再びこれを建て替え、修験中将院（後の喜明院）をして別当と定める。後、千葉大膳大夫重次この地に居りしが、天正年中改易となった。その後、永禄二年（1559、室町）に至り祐永法印（12世和光山喜明院祐永か）更に本社に再興す。」とある。佐藤正助氏の『志津川物語』では、嘉永二年（1848）と推定される「保呂羽権現社」の縁起書から同様の伝承と「旭館館主千葉大膳」と「中将院別当工藤卯エ門尉祐義」が共に歌をよんだ話を紹介し、祭祀の法印を「永禄二年本山派工藤右エ門祐義－祐善－祐永（以下略）」としており³⁰、永禄二年に保呂羽神社の「中興」が相当する可能性がある。一方、宮城県神社庁の上山八幡宮の項にも「文治二年（1186、鎌倉）秀衡の四男本吉四郎高衡にこの地を知行せしめ朝日館に住した際、修験和光山中将院（後の喜明院）をはじめて別当に任じたといわれる。」と元は「朝日館南向いの惣葉沢」に鎮座したとされる。両者に「修験中将院（後の喜明院）」が共通しており、八幡宮の先代の宮司も工藤祐允氏であり「祐」の字が共通している。『安永風土記』では「文治年間（1185～1189）に本山派和光山中将院」としているが時期的には整合しないものの、16世紀中ごろに本

山派修験が本吉氏居城周辺神社の別当を務め、その宗教的、軍事的に重要な立地から本吉氏と結びついた画期と評価されると考えられる。近辺の修験としては、比較的著名な田束山と朝日館背後にそびえる保呂羽山が挙げられる。保呂羽山は、前述したように朝日館の立地と一体的環境にあり、奥州藤原氏の高衡伝承にも包括される特徴がある。『歴史の標』によれば保呂羽山は羽黒派修験の道場であり、南側のふもとの現在の荒町付近に堂社があったとしている。本吉郡の中世修験の解明がポイントとなると思われる。

課題としての参考事項をいくつか挙げる。近世には東北の修験は、幕府の政策により本山派の支配が強まるが、近年の松尾剛次氏の研究によれば、鎌倉後期から南北朝期が羽黒修験の東北地域への展開期であり、南北朝期に里修験の組織化がなされたとされる。同氏は栗原郡や名取の熊野堂の事例を挙げられている。また、同氏が紹介された寛文十三年（1673）に羽黒山執行尊重院圭海が在庁真田七郎左衛門に与えた証文には、葛西之内として「気仙 本吉 壱ノ迫 三之迫 無能 右者無残處 在庁役」「先規之通相違有間敷もの」としており、本吉郡への羽黒派の浸透が中世後期に進んでいたことが推測される³¹。

『歴史の標』には、保呂羽山に関わる24もの堂社が掲げられ、前述の保呂羽権現社の別当本山派喜明院を除き羽黒派の堂社である。同掲の「保呂羽山麓神社仏堂図」を見ると、朝日館のある保呂毛寄りの「熊野本宮」、「熊野新宮」と登攀ラインを異にして「湯殿山」「羽黒山（大権現）」があるので、本来、熊野修験と羽黒修験が共存していたのかもしれない。その場合は、熊野修験系が本山派別当の保呂羽権現社に連なる可能性もある。ただし、山頂近くには「高野堂」もあり、宗教体系と変遷は複雑な様相を示している。これらの歴史的解明は今後の課題である。

次に興味深いのは、破城後の朝日館の利用のされ方で「現在の観音堂の下段は工藤祐義法印の屋敷跡で後、（O家）の先祖が住み、明治大

正時代まで平田上人の住んだ屋敷跡です。」とある。伝承の上でのことだが、保呂羽大権現の別当であり、観音堂を建立した工藤祐義法印の屋敷が、主郭の下段にあったというのである。また、幕の後段に、「高衡公の御歌」として「文治年間藤原本吉四郎高衡公の御歌に「かたときもへがたく見ゆる世の中に月は清よけに澄みのぼるかな 高衡公の御歌」、「久方のそらをふりさけ眺むれば 富士の保呂羽の峯にてる月 高衡公妾登勢の御歌」、「常盤なる松のみどりは変わらねど 朝日が浦にさわぐ白波 高衡公の御歌」、「白波のさわぐ磯辺に住む海人の 浦安かれと祈る心を 祐義法印の御歌」を掲げる。これらの和歌については中世の著名和歌を切り貼りした要素が強く真作とは考えがたい³²。

また、「高衡一人千葉介平の常胤の武将千葉城四郎長茂従い、其の旭館には常胤の子孫千葉頼胤寛喜二年（1230）旭館居城其の正統を名乗る千葉大膳太夫重継公仏門に入り初代大雄寺開祖良元正鉄大居士で有る」とある。個々の記載は年代は別として、藤原高衡が奥州合戦後、許されて後、越後の城長茂に従ったことや城主の千葉大膳太夫重継、大雄寺の墓地に立つ「良元正鉄大居士」碑の存在を踏まえている。これらの幕の文言については、祭主家に伝えられた保呂羽山修験の系譜に連なる伝承に由来するものと考えられる。

10 今後の保護と活用について

今回、現況調査をしてみて、まさに南三陸地域随一の山城との感を強くした。現状は、朝日館（南側の山城）東側の最下部の一部（畑として利用）損壊や古館の林道による一部破壊（「古館」）及び西虎口付近の掘削が認められるものの宮城県有数の規模を誇る山城である朝日館の遺構保存は良好であるといえる。本丸跡付近には「宮城県保安林」の表示がされており、保安林地としての保護もなされている。

城跡の範囲については、東側の平坦地の水尻川の西側に出丸や水尻川からの荷揚げ施設のような関連遺構があってもおかしくはない。今

後、確認調査が必要になると考えられる。

山城に直接関わる遺構の範囲について防衛ラインという観点からは第23図の赤い点線の範囲が想定される。ただし「古館」北西面には二つの谷にいく筋の古道が認められ、「漆房」「金山」の地名・屋号や採掘抗跡が確認されることから関連する遺構を調査する必要がある。

史跡の指定については、長年、文化財保護行政に携わった筆者の経験から国史跡級の価値がある城跡と考えるが、まずは、郷土の歴史を語る貴重な歴史文化遺産として町史跡を検討すべきであるとする。伝城主の墓が町指定となっているのにもかかわらず、朝日館跡が町史跡となっていないのは事情があるのであろうか。今回の調査にあたって南三陸町教育委員会の協力もあり、土地所有者の方々から踏査の快諾をいただき、踏査をしながら地元の方とお話しを続けた経緯からは、南三陸地域の歴史文化遺産を代表する朝日館の優れた価値について地元の理解は深まりつつあると考える。

現況調査は冬期間のみであったので、未だ不十分ではあるが、ひとまず終了した感慨として、朝日館跡は、室町・戦国時代の南三陸地域の歴史を語る内容・保存状況ともに国史跡級の内容を有する山城跡と再確認したしだいである。朝日館跡の北斜面には、縄文土器や石器が散布しており、鉾山の跡や漆栽培の痕跡もあ



第23図 朝日館跡遺跡範囲
（「宮城県遺跡地図」に加筆）

り、まさに数千年にわたる南三陸の歴史を語る宝であり、東日本大震災からの復興まちづくりの仕上げとして町史跡指定をして、郷土の歴史を語る歴史文化遺産として歴史公園整備され、町民やこの地を訪れる人々が戦国の世を生き抜き、このように保存してきた先人に思いを馳せ、志津川湾の絶景を眺望する憩いの場となることを願いたい。

11 志津川湾域の城館分布からの位置付け

宮城県遺跡地図と宮城県遺跡地名表から作図した志津川湾岸域の城館跡の分布図を見る（第24図）。城館がすべて同時存在というわけではないと考えられるが、特徴として挙げられるのは第一に志津川湾を囲むように、約0.3～3 km（直線距離）の間隔で館跡が分布していること。第二に朝日館の北北西約2～4.5kmの入谷地区北部の盆地状地形に七つの館跡が集中するこ

と。第三に志津川湾に沿う街道に連絡する街道沿いに館跡が分布していることである。朝日館跡は志津川湾に沿う館跡の中では、最も奥まった入江の奥に立地していると考えられる。また、北方の気仙方面、西方の北上川方面、南方の戸倉方面にもつながる交通の要衝である。

入谷地区北部には、重海壇、泰生塚、薬師塚、丹後塚、千人塚、行人塚及び山谷寺などの宗教遺跡群が集中しており、千人塚に貞治三年（1364）銘の大型板碑があるほかは、中世に遡る確証はない。背景となる神行堂山には高野山明神、巨石、弘法大師伝説とともに独鈷杵と元「高野寺」本尊とされる蔵王権現木像が伝来している³³。蔵王権現は修験道の本尊であり、神行堂山、童子山の宗教活動との関連性を探求する必要がある。また、朝日館などの戦国期の領主層は、前述したように保呂羽山の修験と関係してくる可能性があり、著名な田束山の修験とも対比、連動してくる可能性があるだろう。



第24図 志津川湾周辺の城館と関連遺跡（「宮城県遺跡地図」をベースに作成）

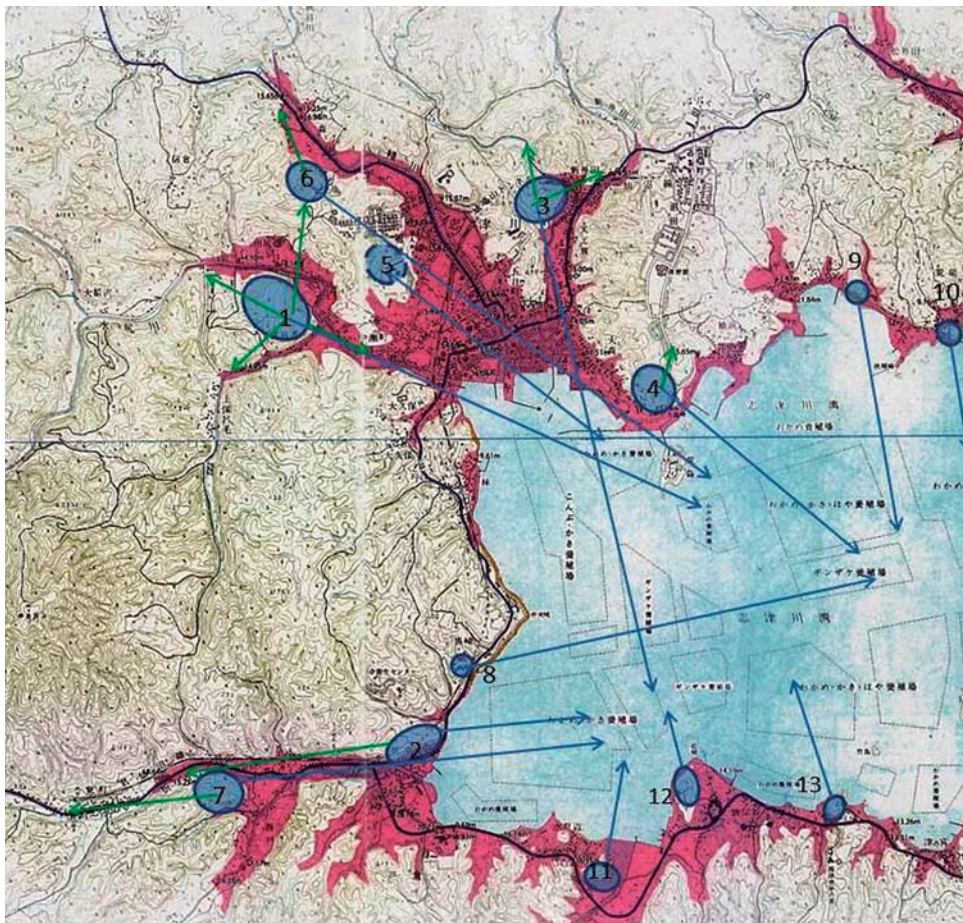
また、主要なものを第24図で示したが、城館の多くは、そのふもとや近辺に板碑群が存在している。朝日館跡のほかにも折立の大平館（塩前寺跡板碑群等）、新井田館跡、松崎館跡（波伝谷板碑群）、やや離れているが沢の前館跡（沢内板碑群）、荒砥館跡と文覚塚付近の板碑、後山館跡と寺浜板碑群、華要害館跡・小森館跡に近い千人塚板碑や100基を越える小型板碑群である沢内板碑群等が挙げられる。年代観的にはこのうち沢内寺に関わる沢内板碑群と上沢前板碑群を除き、城館の年代よりやや早い南北朝時代を中心とすることは朝日館跡周辺例と同様である。

したがって、新井田館跡の発掘調査成果³⁴を参照すれば、南三陸地域では、15世紀初期段階で、志津川湾を眺望しうる各所に山城が築かれ、朝日館主など有力武士がその権益の防御に懸命となっていた状況があったとともに、その前段であ

る14世紀後半の南北朝時代には、板碑造立による往生極楽・現世安穩を願う習俗を採用した有力武士がすでに各山城の周辺に拠点を持ち、有事の際は山城自体を利用していた可能性も考えられる。

12 志津川湾と街道へのパースペクティブ

前述したように朝日館の持つ占地には、この地方を支配するための城的機能が集約されていると同時に、城館からのパースペクティブな視点から考えた場合、志津川湾の船の往来及びそれに沿う道の人馬の往来を十分に把握しようとすれば、朝日館だけの位置では不足していると考えられる。そうした視点から見たのが第25図である。志津川湾はさらに南北に開いていくが、ここでは沿岸に近いエリアを取り上げる。赤色は東日本大震災津波の浸水域である（『東日本大震災津波詳細地図 上巻』2011）³⁵。『歴



第25図 志津川湾（西部）周辺主要城館のパースペクティブ
（『東日本大震災津波詳細地図 上巻』2011をベースに作図）

史の標』掲載の中世の海岸線に近いものの、それを越えて内陸に達している。中世の海岸ラインについては、科学的な究明が必要である。観念的ではあるが朝日館は、図示した沿岸の城館群を配下において初めて、志津川湾を見通すことができ、その支配機能を発揮できるのではないかと考える。『古城書上』や『安永風土記』では城（館）主が記録されているが、「葛西家臣〇〇」などと記載されているが、戦国期には朝日館を居城とする本吉氏家臣的存在の館が第25図の2～13であったという仮説を提示しておきたい。もちろん、パースペクティブな視点は湾だけではなく、湾岸につながる諸街道へも必要である。図では緑線で表したものである。したがって本吉氏を攻略する側にとっては、沿岸沿いもしくは街道沿いの城館とその主を味方につけることが有利に働くわけである。例えば2の折立城がそのような場所の可能性がある。したがってパースペクティブな機能にはA海岸線近くにあり、志津川湾への視点が主となるものの、B街道を抑える機能のどちらかのもの、どちらかに重点をおくもの、両者の双方に重きを持つものが理論上考えられる。相対的傾向としては前者が図示の8から13後者が2から7であろう。なお、5は「廻館」という地名の場所であるが、早くに開発されたためか館跡としての登録はされていない。パースペクティブの観点からも存在していた可能性が高いと考えている。南三陸地域史の先駆者である佐藤正助氏は『志津川物語』（1985）において「廻館」について①古老は「まったて」と呼び、前館という字をあてているところもあるとして（朝日館の）防衛線と考えた。②廻館地区の一番高い山（田中注83m）は剣が森と呼ばれ土壇によって巡らされて防塞地形となっている旨を記しているので、少なくともA的機能を想定してもよいと考えられる。

13 朝日館の広域的な位置付け

今までに述べたように、朝日館跡は志津川湾岸を中心として支配する本吉氏の居城に相応し

い立地と地表顕在遺構群が良好に遺存している。その規模も南三陸町最大規模である。試みに北上川までの範囲を視野に入れ、宮城県遺跡地図をベースに作成したのが第26図である³⁶。第一に志津川湾以外の沿岸にも志津川湾ほどではないが2～3 kmごとに城館が分布すること。同様に北上川沿いでも両岸に1～3 kmごとに城館が存在していることが分かる。一方、志津川湾と北上川を結ぶ三本の街道は、中世には尾根道や山際を通るなど現状とは異なるが、マクロ的には志津川沿いを除き、概ね同一であると考えられる。志津川湾の南辺を通る第一の街道は、南北方向への沿岸沿いの道の分岐点の海際にある大平館跡からいわゆる東浜街道の横山峠を下り、横山不動尊の対岸に大規模な北沢館跡、そして北上町女川に抜ける分岐点に久保城跡がある。東浜街道と北上川の接点には後述する大規模な城である柳津館山館跡がある。したがってこのいわゆる気仙道の一節をなす東浜街道は中世においても重要な街道とみられ、不動明王像（12世紀）で著名な横山不動尊や南北朝期に興したとされる前述の久保城跡の麓にある曹洞宗寺院長谷寺の存在が時代性を裏付けている。第二の街道は、志津川と北上川を結ぶ最北の街道で、津波が麓まで及んだ小森館跡付近から街道北側の入谷盆地の城館集中域の南辺を抜けると城館は確認されていないが、丘陵を越えた北上川との接点付近には城館が四館も集中している。前二者の間の山深い第三の街道がまさに朝日館跡の東麓を通るものである。現状は昭和30年頃車が通れるよう改修したという三つの街道のうちもっとも細道である。水尻川河口北側の小高い丘に位置するおたまや遺跡は板碑集中地区であり、古寺伝承もあって湾口の丘に栄えた朝日館主の菩提所のある小城下と推定されるが、その南辺を通して朝日館跡の東麓を過ぎ、さらに家臣の西城氏の居城とされる平山館跡付近を通り、大板碑群（15世紀前半主体）を伴う沢内寺跡付近から山中に入る。羽沢峠（標高327m）を越えると下羽沢の地には暦応三（1340）年の板碑があり、藩政期の金山跡もある。さらに下ったところに永和三年（1377）勸

請とされる大日神社が鎮座する。『登米町誌第4巻』によると「大日奥の院」の板碑は「一結同心僧衆浄貴賤男女為施主一百人」の銘があり、すでに南北朝期における石塔造立共同体が指導する僧とさまざまな階層の人々によって形成されていることが明らかである。大日神社の西側には吾妻館跡があり、恐らく北上川舟運と連動した南北朝期における志津川に至る街道の往来を予感させる³⁷。北上川に近づくと、葛西家臣小泉伊豆の居館と伝えるどうめき館跡（渦巻館・日根牛城）がある。付近には浦小路・中通（表小路）・横丁・新小路などの地名が残る、葛西氏の頃城下町が存在したと推測されている³⁸。そして、北上川の対岸には巨大な山城がそびえている。宮城県内でも最大規模の山城であり、戦国葛西氏の居城とされる保呂羽館跡である³⁹。戦国期の本吉氏は葛西氏の重臣でありながら、たびたび主君に反逆したことを考えると、山道であるが、約15km（直線距離）離れた両者の居城が北上川に隔てられながらも直結していることは驚きである。もっとも前述のように葛西満信の子重信が南三陸地域の権益確保のため分立したのが戦国期本吉氏誕生の経緯と

すれば納得できる点がある。なお、応永七年（1400年）に奥州探題となる大崎氏の居城は、ほぼ朝日館と保呂羽館跡の延長線上の保呂羽館跡から約33km 西方の名生城跡が根拠地とされており、戦国前期の権力基盤地周辺の海岸部国人の雄としての本吉氏の位置が彷彿とされる。

全体的な傾向としてはこの地域における城館跡は海岸、北上川沿いに数kmごとに分布し、そしてこれらと主街道の接点には地域支配の拠点である大規模な城館が築城されている。したがって朝日館の位置は志津川湾を抑える拠点城館であるとともに北上川舟運と結ばれる諸権益との関係にも意を尽くした配置と考えられる。

14 朝日館跡の近隣における近似例——柳津館山館跡（登米市）

前述した「地域支配の拠点である大規模な城館」は、単に位置と規模から想定されるわけではなく、発掘調査などにより実態が解明される必要がある。そのような実例としては発掘調査が実施された柳津館山館跡⁴⁰について述べる。登米市津山町柳津宮下に所在し、「高森館」と



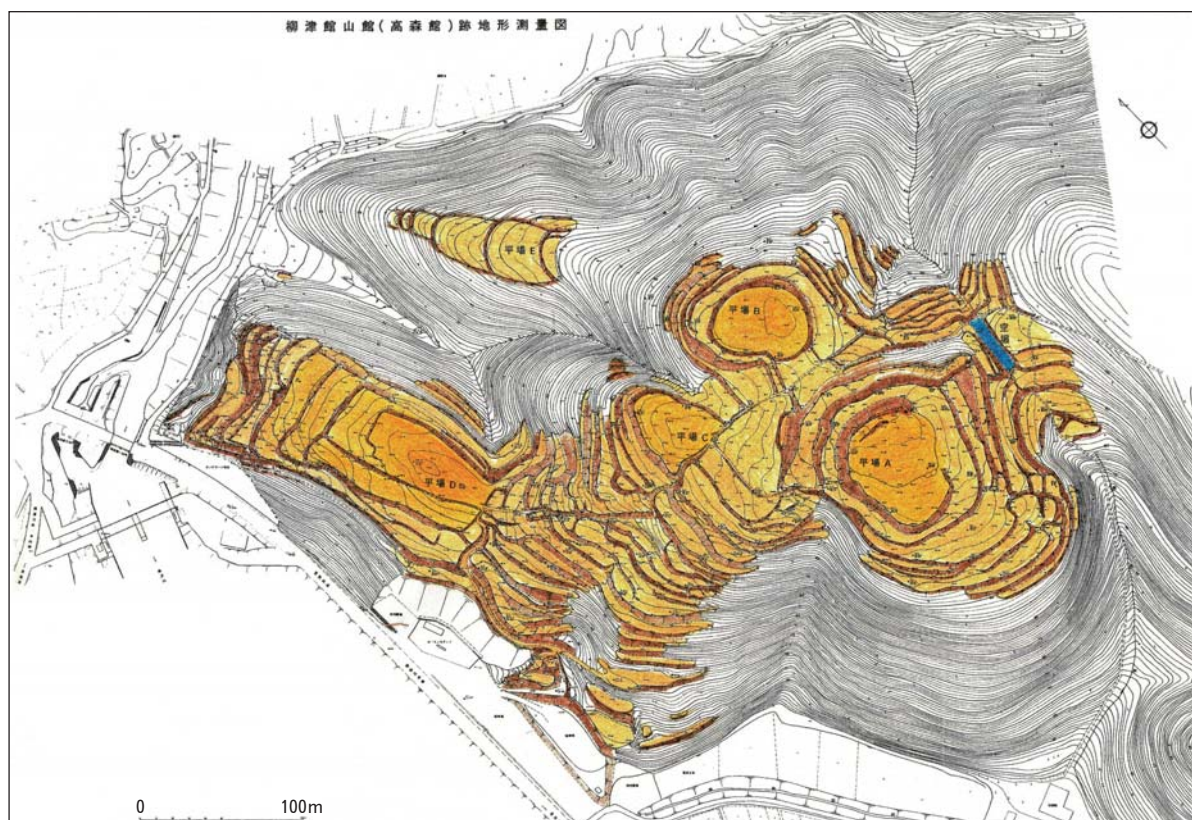
第26図 志津川湾から北上川周辺の城館（「宮城県遺跡地図」をベースに作成）

も呼ばれる。北辺を南沢川、西辺を北上川に画され、南沢川が北上川に合流する付近の北上川東岸の丘陵北西端の突出部に位置し、交差する北上川とそれに沿う街道を抑える要衝にある。北上川対岸には茶臼館跡が対峙するように位置し、北西4km余には主家葛西氏の居城とされる保呂羽館跡がある。館の範囲は南北600m、東西450m、周辺城館では保呂羽館跡に次ぐ規模である。朝日館跡とほぼ同規模であり、最高部標高は110mとより高い。

中心的な平場は、四か所あり、それぞれの周囲下段斜面に腰郭、多数の帯郭群（報告書では「段状遺構」）が配される点、堀や土塁を要所に使う点など朝日館に近似している。1983年に西端部の郭北辺が発掘され、15～16世紀の門跡、竪穴などの遺構が検出された。出土遺物は瀬戸・美濃産・常滑産陶器、中国産青磁・染付・白磁等の陶磁器のみならず硯、温石？、石臼、石鉢、鉄鏃、鎧小札、石突状鉄製品、火打ち金、刀子、鉄鍋、青銅香炉、銭貨等生活及び軍事用品が多種多量である。銭貨は42枚出土し

ている。これらのことから最下段の広い郭Dが戦国期の居住の場となっていたことが推測される。この郭の北辺では「応永」（1394～1427年）年号を含む8基の板碑及び板碑片が出土しており北上川流域を見下ろす地に室町期の板碑群が形成されていたことが推測され、14世紀後半から15世紀初期頃には有力武士の墓所・供養所となっていたと考えられ、朝日館や南三陸町のいくつかの館との近似が認められる。

館主は『仙台領内古城書立之覚』及び『柳津村風土記書出』により黒木紀伊守後、葛西氏の家臣千葉太郎左衛門とされる。段状遺構（幅の狭い帯郭群）を斜面に多数配置するのは葛西氏の特徴とする指摘があり（佐藤信行氏⁴¹）、今後検証していきたい。主郭、副郭が不整楕円形を示す点は朝日館「古館」に近似している。また、主要郭の並列的な配置という点では朝日館南側山城にも近似し、最下段に大きな郭（D）を持つ点や斜面部の段状遺構（狭長な帯郭が段状に集中する遺構群）朝日館南側山城に近似する。これらの点は15～16世紀を通して機能・改



第27図 柳津館山館跡平面図（『柳津館山館跡』1984所載平面図に加筆）

修を進めたことの反映かと考えられ、朝日館跡の機能変遷を考える上で重要である。北上川及びこれに沿う街道が交差する要衝柳津一帯を抑える葛西氏配下の居館型山城と考えられる。

以上のことから柳津館山館跡は朝日館跡とほぼ同等の16世紀、葛西氏配下の国人領主の居館型山城と考えられる。柳津館山館跡では発掘調査により豊富な生活・軍事関係の遺物が出土しており、その年代観から15世紀前半頃から居館型山城として機能している可能性が高いと考えられる。主要な平場が不整楕円形であることからすれば朝日館の古期（古館）の様相に近似しており、朝日館も南側山城域を含めて15世紀前半頃から城館として機能していた可能性が指摘できる。

課題——朝日館をめぐる時空への眼差し

以上の検討を踏まえると、朝日館跡は、15～16世紀において志津川湾一帯を支配する拠点としての居館型山城と考えられる。その形成は陸奥北部で指摘される15世紀前半期における「郡領主級城館の拠点化」⁴²と対応するものと考えられる。南三陸地域随一ではないかと考えられる広大な規模と防御性・居住性を兼備した三ブロック並列型構成は東北地方戦国期拠点城館の並列した郭の在り方⁴³に通底していると考えられる。地域状況としては戦国期における国人領主葛西氏に属するも独立性の強い国人領主であり、沿岸の小国人のみならず主家とも抗争を繰り返したという本吉氏一族の立場と状況を反映していると考えられる。そして、戦国期の水尻川と保呂毛川流域の平野部（おたまや遺跡から家臣居城の華要害館・平山館跡、沢内寺付近まで）は朝日館を支える人々の居住地（広義の「城下」）であり、軍事的緊張の高まった時期はその枢要な人々が朝日館の広い平場に結集、避難しうる状況ではなかったであろうか。

本稿では、周辺城館の縄張図作成という基礎的調査のみならず、朝日館跡に関わる可能性もある「古館」北麓の採掘坑跡や「金山」「漆房」などの魅力的な地名の探求、「朝日館古図」の

朝日館南西の保呂羽山方向に書かれる「往古根小屋」の探求、宮城県域の城館群との十分な比較に至らず、課題となった。また、『古城書上』に類する諸本との比較検討も果たすことができなかった。そして、朝日館をめぐる中世南三陸地域の様相と変遷の解明は大きな課題である。朝日館主をはじめ、三陸沿岸地域の大小国人領主たちはどのような権益を守ろうとして戦乱を繰り返したのかという疑問に答えるのは容易ではない。ただし、南北朝期以降、南三陸地域と北上川周辺の往来が活発になったといういくつかの傍証は見いだすことができている⁴⁵ので紹介しておきたい。

南北朝期、曹洞宗の東北布教の中心である水沢正法寺二世を康安元年（1361）に継いだ月泉良印（本吉郡熊谷氏の出身か）の教線⁴⁶がこの地域に及ぶ前、總持寺峨山韶碩の「二十五哲」の一人とされる竺源超西は、北上川沿いの柳津黄牛に音声寺を開き、横山不動尊対岸の久保に天台宗を改宗して長谷寺を中興したとされる⁴⁷

（第26図参照）。このことは、布教対象となる人々を集める求心力が南北朝期のこの地域に急速に高まっているとの情報が、当時の總持寺（石川県輪島市）二祖の峨山韶碩に達し、その認可の元、柳津・横山の地（現在の登米市津山町）の地に赴いたものと考えられる。近世に北上川舟運を中心とした水陸交通の要衝として「花の柳津」といわれた地⁴⁸は、南北朝期にはすでに要衝であったと考えられ、柳津虚空蔵尊や長谷寺近くの横山不動尊は奥州藤原氏の関与⁴⁹以来、宗教的求心力を持って今に至る。そして横山峠を越えればその先は志津川である。音声寺の竺源超西墓塔に刻まれた没年は永和三年（1377）⁵⁰であり、日根牛の大日神社の「貴賤百人結衆」もまた同年である。一方、志津川の朝日館跡近くには、有力武士、平甲州廣蓮の逆修大型板碑が応安4年（1371）に造立されており、室町幕府安定化の気配とともに、これらの地域においても、後の戦国期小国人領主の先駆けとなる有力武士の成長と地域の活性化、あるいは、そこに着目した曹洞宗峨山韶碩派などの布教開始の痕跡を感じることができるのでは




前述の超西が中興した長谷寺も周辺における「中世までの」金採掘を伝えている⁵⁴。さらに、興味深いのは板碑と関連付けた金山伝承である。入谷信倉の千人塚は『安永風土記』の入谷村の項に「右ハ當村人おて山金山繁昌之砌遊女ヲ相誘金山敷地之内ニ而相果申候山沈之数百人之金掘共一日ニ死亡仕候由此者共爲供養之相立候石碑ニ而千人塚と申伝候右碑面中頃二梵字一字有之」⁵⁵と金鉾山崩壊伝承と貞治年板碑の存在を伝えている。貞治三年（1364）銘板碑は、南三陸町有数の大型板碑にもかかわらず、願文は刻まず、光明真言のみである点、総供養塔の意味合いがある可能性もある⁵⁶。伝承通りとは

朝日館をめぐる地域の実像が明らかになり、近い将来に、以上の課題の探求が進み、新生南三陸町として、復興のまちに住み、交流していく人たちの歴史的アイデンティティの一つとなることを念願する。

付表1 西側虎口石積み観察表

観察期日	2016.10.10				観察者	田中則和
所在	宮城県南三陸町志津川保呂毛					
遺構	朝日館跡 西側虎口					
石材	砂岩？・安山岩？					
方位						
天端長	不明					
露出幅	160cm					
露出高	107cm					
推定残存幅	3 m以上（虎口西側の土留め兼装飾として）					
推定残存高	郭面まであったとして3 m程度					
切石・割石・自然石	割石					
積み方	乱積み					
目地	中段の1.1mていどは横に通るが凹凸あり。					
勾配	三段までの残りの良いところの勾配は97度					
間詰め石	割石と割石の隙間に間詰め石を入れている。					
ハラミ	二段目はややはらんでいる。					
備考	郭のコーナーに対応して湾曲している					
築石	石使い	横	縦	奥行	表面・加工など	原位置・ズレ・ハラミ
1	縦	45	[46]	[20]	自然面か広い剥離面	原位置、下端埋没
2	縦	33	[43]	[9]	割面	原位置、下端埋没
3	縦	25	[50]	[8]	割面	原位置、下端埋没
4	横	17	[11]	[9]	自然面？	右手前にハラミ
5	縦	21	[34]	[12]	割面	ハラミか
6	横	31	[22]	[17]	割面	ややハラミ
7	横？	20	[32]	[6]	割面	ズレ
8	横	25	[16]	[17]	割面	ズレ
9	横	17	11	[9]	自然面？	ほぼ原位置
10	横？	23	10	[20]	割面？	クズレ
11	横？	18	15	[15]	割面	クズレか
12	横	25	38	[12]	割面	ズレ
13	横	56	31	[17]	割面	原位置
14	横	33	25	[13]	自然面？	ややズレ
15	横	36	6	[5]	加工面？	クズレか 天端石風
16	横	20	10	[7]	自然面？	ズレ
17	横	34	23	[8]	割面	ややズレ
18	横	20	21	[11]	割面	ズレ
19	不明	8	11	20	表面不明	原位置でない
20	横	17	5	[2]	割面	原位置
21	不明	14	7	[12]	表面不明	クズレ
所見	副郭南西端の虎口斜面の土留め兼装飾のための石積みと考えられる。小道の右手にも土塁の残存とみられる大小の石が長さ1.6m、高さ1.07mにわたってあるので、本来は東側土塁の石積みとで喰い違い虎口を形成している可能性がある。現状の山道は桑畑開墾の便宜のため近年直線化。					

付表2 石積みB観察表

観察期日	2016.10.17			記載者	田中則和
所在	南三陸町志津川下保呂毛 朝日館跡				
遺構	朝日館跡 西虎口東側土塁石積み				
石材	砂岩？安山岩？				
方位	築石1で磁北より45度東				
天端長	不明				
露出幅	2.2m				
露出高	1.1m				
推定残存幅	2.5m以上（石の散布から）				
推定残存高	3 m 程度（土塁の高さなどから）				
切石・割石・自然石	自然石？、割石				
積み方	乱積みか				
目地	不明				
勾配	築石1 中央で64度				
間詰石	不明				
破損					
ハラミ					
備考	築石1 以外は崩壊の様相を呈している。				
築石	石使い	長さ	高	加工	備考
1	横	68cm	56vm	表面下半の剥離は加工か	外観は自然石
2					
3					
略図					
所見	石は大小38個を確認したが、原位置もしくは原位置に近いものは、築石1のみである。築石1 以外でまとまった大きさをもつものは長さ35～42cm程度のものが3 個であり、他はより小さく、こぶし大のものも多いので、裏込め石の可能性があるものも含んでいる。				

関連写真



第29図 主郭 大土塁



第30図 主郭 手前右側のえぐり部が推定虎口



第31図 西側虎口付近 左手に大石



第32図 西側虎口の南側斜面農道を補強した石積み（西側虎口石積みの再利用か）



第33図 最下段の郭E



第34図 「古館」南東コーナー



第35図 朝日館裾部と水尻川（郭Eの下方「虎口受けの平場」付近から）



第36図 「大雄寺の古碑」（南三陸町指定文化財）

注

- 1 二分類の場合は、山城であり、山城、平山城、平城の三分類の場合は、平地までの遺構の連続性が推定されることから平山城に相当すると考える。
- 2 原口強・岩松暉『東日本大震災津波詳細地図 上巻 青森・岩手・宮城』（2011）古今書院
- 3 佐藤正助『旭ヶ浦物語』（1975）NSK 地方出版、紫桃正隆「志津川城」『史料 仙台領内古城館 第2巻（1973）宝文堂、藤沼邦彦「朝日館跡」『日本城郭体系 第2巻 青森・岩手・秋田』（1980）新人物往来社、佐藤正助『志津川物語』（1985）NSK 地方出版、『歴史の標 志津川町誌Ⅲ』（1991）志津川町
- 4 『宮城県史 第26』（資料篇 第4（1958）宮城県史刊行会
- 5 「宮城県遺跡地名表」宮城県教育庁文化財保護課
- 6 「古館跡」南三陸町バーチャルミュージアム HP（南三陸町）
- 7 「仙台古城記」『仙台叢書 第四巻』（1923）仙台叢書刊行会
- 8 菅野文夫「藤原高衡と本吉荘—平泉と東国の一断面—」『平泉文化研究年報11』（2011）岩手県教育委員会事務局生涯学習文化課
- 9 竹内理三ほか『宮城県姓氏家系大辞典』（1994）角川書店
- 10 『歴史の標 志津川町誌Ⅲ』（1991）志津川町
- 11 東日本大震災津波により多くの板碑が倒壊、破損し、南三陸町教育委員会にて保管中（2016.11月現在）
- 12 室野秀文氏にご教示いただいた。当初は西風除けと考えていたが、後藤一磨氏（南三陸町文化財保護委員）より、南三陸地域では春先のイナサ（海からの季節風）が寒く強いとのこと教示をいただいた。このことを考慮すれば、館主の居宅は、標高が最も高く、井戸のある東側と考えたが、大土塁の西側の可能性が高いと考えておきたい。
- 13 松岡進氏にご教示いただいた。
- 14 『古城書上』類段階では、執筆時期と下記変遷観により一間6尺5寸を採用していた可能性が高い。阿子島香・藤沢敦・柴田恵子・高木暢亮「仙台城と周辺武家屋敷における近世建物の基礎構造」『東北大学埋蔵文化財調査年報19』（2013）東北大学埋蔵文化財調査室
- 15 南三陸町教育委員会『新井田館跡 津波復興拠点整備事業（志津川中央地区）に係る発掘調査報告書』（2016）
- 16 『新井田館跡』が2016年4月に刊行されたのを受けて2016年5月15日に開催された宮城県考古学会平成28年度総会・研究発表会の特集：「復興関係調査で拓かれた地域の歴史2 南三陸地域の中世社会—新井田館跡を中心に—」では、新井田館跡の調査成果が検討され、遺構の視点から室野秀文氏が14世紀に遡る館の存在の可能性を指摘している。新井田館跡下辺では、貞和三年（1347）銘の銘文を持つ板碑以後、14世紀末まで小規模な板碑群が形成され、武士が近辺にいたことが想定される。
- 17 松岡進『戦国期城館群の景観』（2002）校倉書房
- 18 福島県文化センター遺跡調査課『木村館跡』（1992）福島県教育委員会
- 19 中井均「織豊系城郭の画期」村田修三編『中世城郭研究論集』（1990）新人物往来社
- 20 飯村均氏より本石積みについては、写真を見た限り、かなり崩れているが天正10年（1582）代の可能性とのご教示をいただいた。また、同じく写真上の見解として宮里学氏（山梨県教育委員会）より、山梨県の場合も16世紀第一四半期からの16世紀にこのような石積みが集中する傾向があるとのこと教示をいただいた。
- 21 佐藤正助『旭ヶ浦物語』（1975）NSK 地方出版
- 22 紫桃正隆『みやぎの戦国時代合戦と群雄』（1993）宝文堂
- 23 高橋圭次氏からは、縄張図（2015年段階）をご覧いただき伊達郡南部の城館との比較から、16世紀半ばから後半の様相を示すとして種々のご教示をいただいた。
- 24 「南三陸地域」は、南三陸町という現代の町域を越えた意味で使用する。
- 25 妙樹禪尼板碑と地域状況については、「妙樹禪尼の逆修「石塔」造立」と題して平成27年11月に東北学院大学中世史研究会『六軒丁中世史研究』17号に投稿しており、願文の禅宗回向文との共通性などの詳細は発刊の折に参照していただきたい。ただし見解については、本稿が最新の見解である。
- 26 志津川町誌編さん室編『生活の歓』（1989）志津川町
- 27 藺田稔、橋本政宣編『神道史大辞典』（2004）吉川弘文館、「デジタル大辞泉」
- 28 入間田宣夫「鎌倉武士団の入部」『石巻市史 第1巻』（1996）石巻市

- 29 本尊の観音像については大雄寺の許可をいただ
いて写真を長岡龍作教授、政次浩学芸員に見てい
ただいたところ中世末期～近世の作とご教示いた
だいた。
- 30 佐藤正助『志津川物語』（1985）NSK 地方出版
- 31 松尾剛次「羽黒修験の中世史研究—新発見の中
世史料を中心に」『山形大学大学院社会文化システ
ム研究科紀要 創刊号』（2005）山形大学
- 32 入間田宣夫氏からのご教示もいただいた。
- 33 入谷郷土史研究会『入谷物語』（1980）入谷公民
館・志津川町 木像については佐藤正助『志津川
物語』（1985）NSK 地方出版 本稿脱稿の後、独鈷
杵と蔵王権現像を山内明美氏（大正大学）と所有
者のご厚意により拝見。右手に三鈷杵を持つ蔵王
権現像の年代について、写真での所見を時枝務氏、
久保智康氏、長岡龍作氏にうかがったところ、一
致して、近世、独鈷杵については中世後期（時枝
務氏）もしくは近世（久保智康氏）との教示を得た。
- 34 南三陸町教育委員会『新井田館跡 津波復興拠
点整備事業（志津川中央地区）に係る発掘調査報
告書』（2016）
- 35 原口強・岩松暉『東日本大震災津波詳細地図
上巻 青森・岩手・宮城』（2011）古今書院
- 36 北上川の流路は『登米町誌第5巻』（1995 登米
町誌編纂委員会）の「北上川」に記されているよ
うに中世においては異なる。しかし現状の北上川
沿いに城館が分布することと地形を勘案すると、
本図の北上川の流路は中世の北上川の東端ライン
に近いと考えられる。
- 37 羽沢峠については小野寺寅雄『みやぎの峠』
（1999）河北新報社 板碑については、『登米町誌
第4巻』（1993登米町誌編纂委員会）を参照した。
- 38 「日根牛村」『宮城県の地名』（1987）平凡社
- 39 保呂羽館跡の「保呂羽」は朝日館跡の背後にあ
る保呂羽山と同一名であり、アイヌ語の「ホロ」：
「大いなる」というニュアンスに関わる可能性も
あるが、今後の課題である。
- 40 平沢英二郎・阿部恵『柳津館山館跡』（1984）宮
城県教育委員会
- 41 2015年宮城県考古学会中世考古学部会例会での
指摘。
- 42 室野秀文「陸奥北部の館」『鎌倉・室町時代の奥
州』（2002）高志書院
- 43 千田嘉博『織豊系城郭の形成』（2000）東京大学
出版会
- 44 竹内理三ほか『宮城県姓氏家系大辞典』（1994）

角川書店ほか

- 45 田中則和「妙樹禪尼の逆修「石塔」造立」『六軒
丁中世史研究』第17号（予定）。
- 46 佐藤秀孝「月泉良印の伝記史料『二代月泉和尚
行状』の翻刻と訳註」『駒沢大学仏教学部論集』第
42号（2011）駒沢大学
- 47 田中則和「妙樹禪尼の逆修「石塔」造立」『六軒
丁中世史研究』第17号（2015年11月投稿）に詳述。
長谷寺は寺伝では元応元年（1319）開山（天台宗
を改宗）であり、晩年に峨山門下となる以前、大
嶋氏の一族で「俗鍛冶」の超西が当地で活動、あ
るいは情報を得ていた可能性もある。
- 48 「柳津村」『宮城県の地名』（1987）平凡社
- 49 『神さま仏さまの復興：被災文化財の修復と継
承：東日本大震災復興祈念特別展』（2013）東北歴
史博物館
- 50 宮城県寺院総覧編纂会編『宮城県寺院大総覧』
（1975）宮城県寺院総覧編纂会など開山の年との
記載もあるが定点に近い年と考える。田中則和「妙
寿禪尼の逆修「石塔」造立」『六軒丁中世史研究』
第17号（予定）
- 51 岡陽一郎「奥州金山史序説—宮城県を中心に—」
『日本の金銀山遺跡』（2013）高志書院
- 52 「忘れられた産金遺跡」南三陸町バーチャル
ミュージアムHP 南三陸町
- 53 紫桃正隆「華要害館」『史料 仙台領内古城館
第2巻（1973）宝文堂
- 54 「長谷寺」『三十六門を訪ねて 大本山總持寺御
直木』（2013 總持寺
また、「南沢村」『宮城県の地名』（1987）平凡社
では「中世まで金の産出地であったと伝え」とする。
- 55 志津川関連史料は志津川町編さん室『志津川町
誌資料集1』（1990）志津川町など参照
- 56 田中則和「妙樹禪尼の逆修「石塔」造立」『六軒
丁中世史研究』第17号（予定）。
- 57 田中則和「妙樹禪尼の逆修「石塔」造立」『六軒
丁中世史研究』第17号（予定）。

補注

本稿で作図のベースとした「宮城県遺跡地図情報」
（宮城県教育庁文化財保護課）は、国土地理院が公
開する「地理院地図」を利用し表示されたものである。